展望

進化し続ける電気化学を

岩堀 徹

1980年代まで続いた日本の「成功」が90年代に停滞し、04年になった今日でもなお一部を除いて立ち直らない状況は産業界だけでなく学会にも影を落とし、多くの学協会で会員数の減少を招いているという。その中で本電気化学会は会員数も増加し4千名を超え、大会への参加者も近年記録更新中という。不況の90年代になっても、産学官が一体となってリチウム電池、燃料電池、環境光触媒、センサなど新しい化学技術に取り組んで世界をリードしてきたからであろう。たまたま古い本を整理して気がついたことであるが、電気化学専門の便覧を発行したのは世界でわが国がはじめて（昭和17年）であり、さらに本会30周年記念事業（昭和39年）の新版時でも世界唯一の電気化学便覧であったという。

ソーダ電解工業での水銀法の使用中止をイオン交換膜法の発展で乗りきったこと、前述の90年代からの電気化学の隆盛などは、これらの便覧などで播かれた種が開花したものと思うと諸先輩の学会活動に頭が下がる思いである。

昭和39年の便覧の目次と今年71回大会のプログラムをざっと見比べると、本会が伝統的な電気化学分野だけでなく、「薄膜・微粒子成長と微細加工技術」、「生命科学と電気化学」、「機能創造と有機電気化学」、「分子機能電極」など、ナノとバイオをも取り入れて展開しようとしていることがわかる。電気化学の扱
うところはイオン、電子、材料（原子・分子の集合体）とそれらの界面現象であり、
電気工学でのキルヒホッフの法則、オームの法則、マクスウェルの電磁理論を基調とするほど明快な論理展開が出来ないもどかしさを感じるが、「正解」がわからないところでの、「洞察・想像力」と仮説と試行錯誤を繰り返す中での「論理性」とがより望まれる分野であると思う。こうした特質を持つ電気化学の基本を卒業論文や修士論文で十分訓練していれば、今後とも新しい素材・対象が出てきても対応可能な技術者・研究者が育っていくものと期待している。

諸先輩の努力を引き継いで、本会の活動が核になりこれからも電気化学が進化し続けることを願うものである。

Toru IWAHORI

本会 15, 16 年度編集理事
(財)電力中央研究所
CS 推進本部 CS 推進部
受託推進チーム スタッフ、上席